

千葉大学学生のスポーツに対する態度について

片山 孝重¹、畑 攻²、土屋 正則³、畑 誠之介³

¹千葉大学、²帝京大学、³千葉工業大学

Analysis on the student's attitude toward sports in Chiba University

Takashige KATAYAMA¹, Osamu HATA², Masanori TSUCHIYA³

and Seinosuke HATA³

¹Chiba University、²Teikyo University、³Chiba Institute of Technology

Abstract

We have been examining the student's attitude toward sports in Chiba University. With the findings of this examination, we will report what factors concern with student's attitude toward sports in Physical Education classes, and how it affects teaching and other matters.

【緒 言】

本研究は、千葉大学学生のスポーツに対する態度¹⁾について調査分析を試みるものである。筆者らは、学校体育経営に関わる者としてまた、クラスを通して体育実技指導を担当する者として、経営や指導について広くかつ柔軟にさまざまな問題に取り組んでいるが、特に1989年にみられた大学体育をめぐる社会的な提案は、体育・スポーツをどう考えるか、経営をどうするのか、についての我々への問いかけであった。そのような問いに
応える第一歩として、運動者（学生）の把握を試

みたのである。そして得られたごく基礎的な結果は、少なくとも筆者ら体育教官にとっては、特に指導の場面で貴重な意味を持つのではないだろうか。

毎年の資料の蓄積が必要であつことは言うまでもないが、今回は、性別、学年という観点から、学生のスポーツに対する態度について、まず妥当な因子を模索した。

【方 法】

1. 調査の方法

千葉大学教養部体育受講学生一、二年次学生を

対象に質問紙による調査を行なった。

なお、千葉大学では、半期毎に計三回の体育実技が必修となっており、受講学生は当然のことながら三種の異なったスポーツ種目を選択することが原則となっているを付け加えておく。

調査期間は 1989年 5月から同年 7月までの三カ月間で、回収された有効標本数は1283であった(表1)。

2. 調査・分析項目

具体的な態度測定のための項目は表2に示されるものであり、受講学生(以下、学生)には、これらの項目を5段階スケールによって自己評価をさせた。

表1. 種目・学年別調査対象者

種目	1 年		2 年	
	男 子	女 子	男 子	女 子
剣 道	6	9		
柔 道	9	8		
卓 球	101	78	35	45
テ ニ ス	52	56	43	55
バ レ ー ボ ー ル	31	47	53	43
バ ス ケ ッ ト ボ ー ル	11	10	98	40
サ ッ カ ー	97	31		
ソ フ ト ボ ー ル	152	23		
野 球	30	5	54	24
体 力 づ く り (不 明)	25	4	3	2
合 計	515	273	286	209

表2. 運動・スポーツ活動に対する態度の測定項目

1 私は運動やスポーツが好きである	23 試合に出て勝ちたい
2 私は運動やスポーツが得意である	24 いろんな人と楽しみたい
3 私は体力に自信がある	25 思いきり運動してたっぷり汗をかきたい
4 私は運動やスポーツがいつも楽しくできる	26 うまくならなくても楽しければよい
5 新聞や雑誌のスポーツ欄を見たい	27 運動やスポーツをとおして友達をたくさんつくりたい
6 競技場や体育館に出かけてスポーツを観戦したい	28 気晴しや気分転換のために運動やスポーツをしたい
7 テレビやラジオのスポーツ放送に興味がある	29 運動やスポーツで精神力を養いたい
8 仲間と一緒に運動やスポーツがしたい	30 運動やスポーツで体力をつけたり、健康な体をつくりたい
9 毎週あるいは毎日など定期的に運動したい	31 運動やスポーツをしてスタイルを良くしたい
10 スポーツのいろいろな催しに参加したい	32 私は運動やスポーツをするとき、人をさそってする方である
11 スポーツ教室やスクールに入って習いたい	33 私は他の人から運動やスポーツを誘われる方である
12 思いきり運動ができて楽しい	34 私は自分からすすんで運動やスポーツをする方である
13 汗をかいてすっきりする	35 私はリーダーやキャプテンとしてよくチームをまとめていく方である
14 生活が楽しく豊かになる	36 私は運動やスポーツの基礎的な技術はすぐれている方である
15 仲間とゲームや競争ができて楽しい	37 私は練習した技術やプレーをゲームでうまく生かせる方である
16 仲のよい友達ができる	38 私はいろいろな練習の仕方を工夫するのがうまい方である
17 自分または自分のチームが勝ったり、うまくできたりして楽しい	39 私はゲームの作戦をいろいろ工夫するのがうまい方である
18 うまくできたり勝ったりして、先生やクラスの仲間にもめられてうれしい	40 私はみんなと励まし合って練習やゲームをする方である
19 助け合い協力し合う態度が身につく	41 私はメンバーのミスを責めたり、バカにしたりしない方である
20 うまくなるように工夫するのが楽しい	42 私は勝ち負けにこだわらず最後まで全力を尽くす方である
21 勝つための作戦を考えるのが楽しい	43 私はふだん運動やスポーツがどうしたらうまくなるか、考える方である
22 自分の記録が向上して楽しい	

【結果と考察】

1. スポーツに対する態度の因子の解釈

態度項目の因子分析を行ない、主因子法による回転前の固有値が 1.0以上を基準として、6 因子に決定した（表 3）。この結果、6 因子で全分散の 59.6%が説明されている。

表 3. スポーツに対する態度の回転前の固有値と寄与率

	I	II	III	IV	V	VI	VII
固有値	15.661	3.211	2.056	1.863	1.497	1.328
寄与率	36.421	7.468	4.782	4.332	3.482	3.087
累加寄与率	36.421	43.888	48.671	53.003	56.485	59.572	

表 4. スポーツ活動に対する態度の因子分析（主因子、NORMAL VARIMAX）

変数	アイテム	因子負荷量
第 1 因子 : 開放欲求 (サークル志向)		
13	汗をかいてすっきりする	0.763
12	思いきり運動ができて楽しい	0.738
25	思いきり運動してたっぷり汗をかきたい	0.688
9	毎週あるいは毎日など定期的に運動したい	0.687
8	仲間と一緒に運動やスポーツがしたい	0.670
14	生活が楽しく豊かになる	0.663
1	私は運動やスポーツが好きである	0.640
15	仲間とゲームや競争ができて楽しい	0.566
10	スポーツのいろいろな催しに参加したい	0.562
16	仲のよい友達ができる	0.527
第 2 因子 : 自信 (自己表現志向)		
37	私は練習した技術やプレーをゲームでうまく生かせる方である	0.837
36	私は運動やスポーツの基礎的な技術はすぐれている方である	0.834
38	私はいろいろな練習の仕方を工夫するのがうまい方である	0.809
39	私はゲームの作戦をいろいろ工夫するのがうまい方である	0.791
2	私は運動やスポーツが得意である	0.729
35	私はリーダーやキャプテンとしてよくチームをまとめる方である	0.699
3	私は体力に自信がある	0.572
34	私は自分からすすんで運動やスポーツをする方である	0.560
4	私は運動やスポーツがいつでも楽しくできる	0.526
第 3 因子 : スペクテーター欲求 (情報志向)		
7	テレビやラジオのスポーツ放送に興味がある	0.827
5	新聞や雑誌のスポーツ欄を見たい	0.799
6	競技場や体育館に出かけてスポーツを観戦したい	0.767
第 4 因子 : 競争・達成の欲求 (内容志向)		
21	勝つための作戦を考えるのが楽しい	0.749
22	自分の記録が向上して楽しい	0.729
20	うまくなるように工夫するのが楽しい	0.724
18	うまくできたり勝ったりして、先生や仲間にはめられてうれしい	0.659
19	助け合い協力し合う態度が身につく	0.652
17	自分または自分のチームが勝ったりうまくできたりして楽しい	0.605
23	試合に出て勝ちたい	0.502
第 5 因子 : マナー (他者関連志向)		
42	私は勝ち負けにこだわらず最後まで全力を尽くす方である	0.732
41	私はメンバーのミスを責めたり、バカにしたりしない方である	0.711
40	私はみんなと励ましあって練習やゲームをする方である	0.556
第 6 因子 : 手段的効用感 (自己訓練志向)		
31	運動やスポーツをしてスタイルを良くしたい	0.769
30	運動やスポーツで体力をつけたり、健康な体をつくりたい	0.468
29	運動やスポーツで精神力を養いたい	0.462

2. 決定した6因子とその解釈

第1因子は、汗をかいてすっきりする、思いきり運動ができて楽しい、思いきり運動してたっぷり汗をかきたい、といった項目に代表されるように、日常生活から少しでも開放されたいという欲求が伺えるもので、これを筆者らは「開放欲求」の因子として解釈した。

第2因子は、学生個々の過去におけるスポーツ経験を通して得られたさまざまな事柄、例えば、技術、練習方法、戦略・戦術、リーダーシップ、等々について、自己評価し、スポーツ活動の場面で総じて、積極的に自分を主張できるといったことに関する項目である。従って筆者らはこれを“自信”として解釈した。そして、私は練習した技術やプレーをゲームでうまく生かせる方である、運動やスポーツの基礎的な技術はすぐれている方である、そしてまた、いろいろな練習の仕方をくふうするのがうまい方である、といった項目が、この因子の中では高負荷量を示すものであった。

第3因子は、スポーツ活動に間接的に参加する（観る・見る）といったもので、“スペクテーター欲求”として解釈した。

第4因子は、勝つための作戦を考えるのが楽しい、記録が向上して楽しい、あるいはまた、うまくなるように工夫するのが楽しいなどの項目で、スポーツ活動のなかみにまで入り込んだ、活動参加への最も積極的な意欲の感じられるもので、筆者らは“競争・達成の欲求”としてこれを解釈した。

第5因子は、勝敗にこだわらず最後まで全力を尽くす、他人のミスを責めたり、バカにしたりしないなど、スポーツマンとしての心構えに関する項目で、これを“マナー”として解釈した。

第6因子は、運動やスポーツをしてスタイルを良くしたい、に代表されるもので、“手段的効用感”としてこれを解釈した。

そしてさらに、これらをスポーツ活動の実際すなわち体育実技授業の内容との関連からそれぞれ

て示した「志向」というとらえ方も、筆者らは体育教官という立場においては重要な意味を持つものとの考えから次のような解釈も付け加えた。

第1因子では、スポーツ活動を仲間と共に汗をかき、といった項目も含まれ、一人よりも複数でといった“サークル的な志向”が強いものと解釈できる。

第2因子では、他と比較して自信となるものがある、逆に言えば自分についてアピールしたい、“自己表現”をしたい志向と解釈できる。

第3因子は、スポーツ活動にどのくらい直接参加するかは明らかでないが、間接的に参加することは好きだという、いわば“情報（受け入れ）志向”の強さを示しているといえよう。

第4因子は、スポーツ活動の中に充分に入り込む、すなわち活動内容を問題とする志向と解釈でき“内容志向”としてとらえた。

第5因子は、“他者との関連を大切に（分離できない）志向”そして第6因子は、“トレーニング（自己訓練）志向”として解釈できる。

これらの志向は、千葉大学体育実技受講に際して、学生がどのような選択行動を起こすか、そしてまた、指導者として授業内容、特に指導の場面でどのような対応をしていくことが必要かについて一つの問題を提起するものとして、筆者らにとっては意義深いものと指摘できる。

3. 因子に対する学生の反応

学生個々の因子に対する反応が異なることは当然のことながら予想される。今回は第一歩として学年と性別によってそれぞれの因子に対する学生の反応を検討した。

因子のスコアの算出の仕方にはさまざまな方法があるが、ここでは、因子に相当する項目の平均点を算出し、さらに標準化した点数（標準偏差が1.0、平均が0、になるよう）に処理した。

1) 男・女別にみた因子スコア

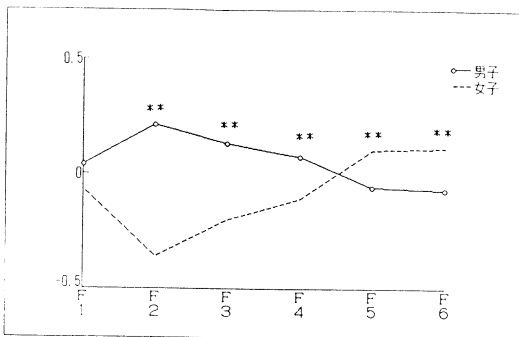
まず、学生の最も基本的な属性を示す性別と因子スコアの関係を見ると表5、図1に示されるとおりである。第1因子を除いた全てにおいて男女に差が認められる。すなわち男子は女子に比較して、第2、3、4因子が高く、自己表現・情報・内容志向が強い。逆に女子では、第5および第6因子において男子よりも高く、この結果は、筆者らの経験から得られた予想と一致した。

表5. 男女別の因子スコア

因子	男子 (N=801)	女子 (N=482)	有意差
F1	0.04	-0.07	
F2	0.21	-0.36	**
F3	0.13	-0.20	**
F4	0.07	-0.11	**
F5	-0.06	0.10	**
F6	-0.07	0.11	**

**は1%水準

図1



授業やその他のスポーツ活動では、高い志向性をどのように活かすか、あるいは低い部分をどう教育・指導するかは、さらに活動の実際やいくつかの今後の試みとの関係を待って方針を決定しなくてはならないが、いづれにせよここでは、抽出した6因子が、男女間でいわば妥当な反応を示し

ていることが確認されたといえよう。

2) 学年別にみた因子スコア

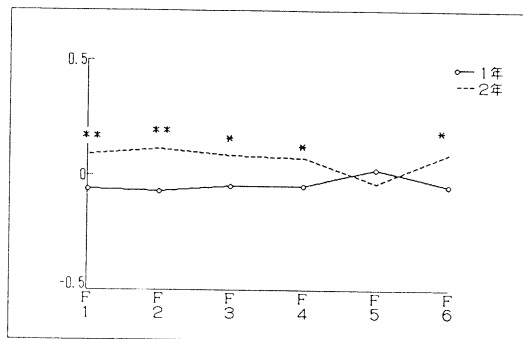
第5因子を除いて、二年生の方が高い結果を得た。ごく一般的には、二年度学生の体力面での低下が指摘されることが多いが、今回の結果からは、態度面での高まりがみられて興味深いものとなった。特に第4因子のような運動・スポーツの内容に直接関わる因子を通しては、スポーツの楽しみ方がより高まったり、深まったりしているのではないかと推測される。しかしながらあと少しの異なる年度における追調査を待たなければ結論づけることはできない。そしてまた、授業の内容、進め方についても学年別に少なから異なる工夫を加えることも必要であるとの提案についてもあと少しの検討が残される(表6、図2)。

表6. 学年別因子スコア

因子	一年生 (N=788)	二年生 (N=595)	有意差
F1	-0.06	0.09	**
F2	-0.07	0.11	**
F3	-0.05	0.08	*
F4	-0.05	0.07	*
F5	0.02	-0.04	
F6	-0.05	0.09	*

**は1%水準、*は5%水準

図2



3) 一年生男女別の因子スコア

次に同一学年での男女間の反応について検討した結果が表7、図3である。

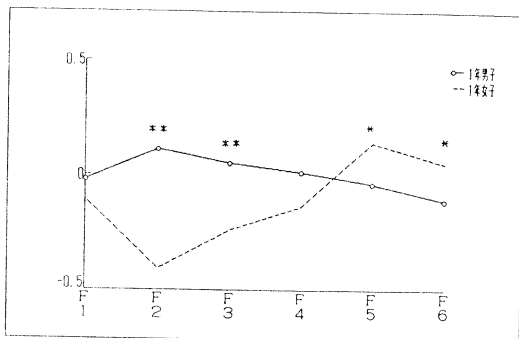
ここでは第2因子(自信; 自己表現志向)、第3因子(スペクテーター欲求; 情報志向)、第5因子(マナー; 他者関連志向)、第6因子(手段的効用感; 自己訓練志向)、に有意な差がみられる。

表7. 一年生男女別の因子スコア

因子	男子 (N=515)	女子 (N=273)	有意差
F1	-0.02	-0.11	
F2	0.11	-0.41	**
F3	0.05	-0.24	**
F4	0.01	-0.14	
F5	-0.04	0.14	*
F6	-0.11	0.05	*

**は1%水準、*は5%水準

図3



男子では第2、3因子が高く、女子は第5、6因子で高い。千葉大学では男女合同で授業を進めているが、このような男女の差を認め、さらに特質を活かし、あるいは補ったりする工夫が必要なようである。特に女子に対しては自信のなさを解消するために、課題を平易なものにする、そして男子についてはマナーに関する指導をするなどが

指導上の一つのポイントとなりそうである。過去に学生達が経験を通して得た体育・スポーツ観を含めてもう一度見つめなおす機会を与えてやらなければならないのではないだろうか。

4) 二年生男女別の因子スコア

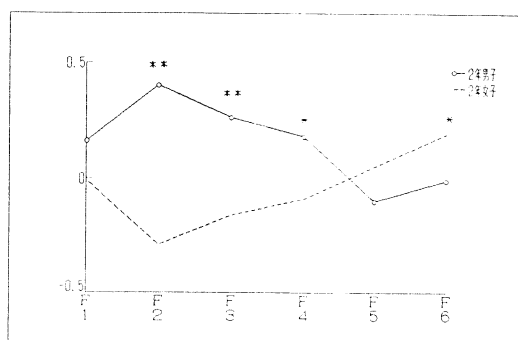
ここでは、男子が、第2、3、4因子で高いのが顕著であるが、これは、基本的には先に示した一年生と同様の傾向にあるといえる。ただし第5因子で、一年生と逆の結果がみられた(表8、図4)。

表8. 二年生男女別の因子スコア

因子	男子 (N=286)	女子 (N=209)	有意差
F1	0.16	-0.01	
F2	0.40	-0.29	**
F3	0.26	-0.16	**
F4	0.18	-0.09	*
F5	-0.10	0.05	
F6	-0.01	0.19	*

**は1%水準、*は5%水準

図4



5) 男子学年別、女子学年別の因子スコア

男子では、第5因子(マナー)を除いて、全ての因子において二年生の方が高い結果を示している(表9、図5)。

表9. 男子学年別の因子スコア

因子	一年男子 (N=515)	二年男子 (N=286)	有意差
F1	-0.02	0.16	*
F2	0.12	0.40	**
F3	0.05	0.26	**
F4	0.01	0.18	*
F5	-0.04	-0.10	
F6	-0.11	-0.01	

**は1%水準、*は5%水準

図6

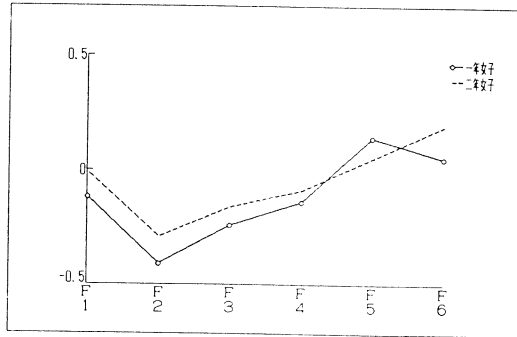
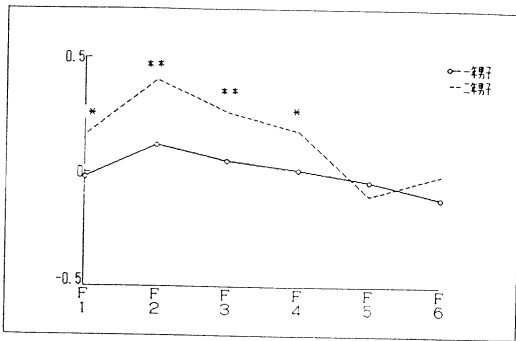


図5



また女子では表10、図5に示されるように学年間での差はほとんど認められなかった。

表10 女子学年別の因子スコア

因子	一年女子 (N=273)	二年女子 (N=209)	有意差
F1	-0.12	-0.01	
F2	-0.41	-0.29	
F3	-0.24	-0.16	
F4	-0.14	-0.09	
F5	0.14	0.05	
F6	0.05	0.19	

**は1%水準、*は5%水準

これらの結果から特に男子学生に対しては二年次授業で一年次以上の、彼らの高いニーズに応えられるだけの内容を考えていかななくてはならないと言えるのではないだろうか。

併せて、女子の場合、先にも指摘したが、一年次体育実技で特に、高校時代迄とは違った、新鮮な刺激を与えてやる必要性も指摘できそうだ。

【まとめ】

今回の調査分析の結果、学生のスポーツに対する態度について、開放欲求、自信、スペクテーター欲求、競争・達成の欲求、マナー、そして手段的効用感という妥当な6因子を抽出することができた。

また、男女間、学年間の特色も因子スコアに表われた。

筆者らは、大学体育指導者が過去の経験から予想をすることができた性別と因子の関係、すなわち、男子では自信：自己表現志向、競争・達成の欲求：内容志向、女子ではマナー：他者関連志向、手段的効用感：自己訓練志向が高いだろうということは、今回の分析にによって間違いのないことが確認された。

学年別に考察した結果は、男子では二年生の方がマナーに関する因子を除いて、全てに一年生よりも高い傾向を示した。特にこのことは、スポー

ッ活動への積極的な姿勢を示すものとしてとらえてもよいのではないだろうか。一方、女子においては、学年による差異はほとんどなかった。

今後は、今回の結果が、千葉大学だけにみられる傾向なのか、対象年度学生にのみみられる傾向なのか等について追調査、分析が必要である。また、質問紙による調査だけでなく、実際の活動場面での資料も加えて考察を進めていくことも必要である。そのような手続きの後に、より確かにそして具体的に体育授業への新しい提案ができるものと考えている。

脚注

- 1) 態度については、多くの定義があるが、オルポートらに代表されるような、「ある態度の対象について、特定のしかたで反応する準備状態である」という非常に広義な用いかたをした。

参考文献

- 1) 学校革新を規定する組織風土要因の分析、教育学研究 河野 和清、日本教育学会 1984
- 2) 現代消費者行動論 柏木 重秋 白桃書房 1982
- 3) ソーシャル・マーケティング 三上 富三郎 同文館 1982
- 4) 因子分析法 芝 祐順 東京大学出版会 1972
- 5) 体育管理学 宇土 正彦 大修館書店 1970
- 6) 体育教育法入門 嘉戸 修 大修館書店 1983
- 7) 体育経営学の課題Ⅲ 山下 秋二 体育管理分科会会報19号 1983
- 8) SPSS統計パッケージⅡ 三宅一郎他 東洋経済新報社 1977
- 9) スポーツ活動に対する態度パターンによるマーケット・セグメンテーション的研究 畑 攻他 体育経営学研究 2巻 1985